九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

日本語の原因・理由節における付加詞条件を巡って

吉村, 理一
九州大学大学院 : 博士課程

https://doi.org/10.15017/1909534

出版情報：九大英文学. 58, pp.147-168, 2016-03-31. 九州大学大学院英語学・英文学研究会
バージョン：
権利関係：

日本語の原因・理由節における付加詞条件を巡って*

吉村　理一

1.　導入

本論文では、日本語の副詞節を考察対象にし、付加詞の島条件（Adjunct Island Condition）の適用を免れる例外を取り上げ、その文法性が Haegeman (2006, 2012)によって提案されている「副詞節を２分類する分析」を援用することによって説明されることを示す。考察の主対象とするのは、原因や理由を表す、英語の *because* 節に相当する*-node* 節である。

英語では、副詞節など、主節に対して付加構造を成す領域からのあらゆる種類の要素の抜取りは原則的に禁止される（＝付加詞の島条件）。この付加詞の島条件を巡っては、Huang (1982)による摘出領域条件（Condition on Extraction Domain: CED）分析、Chomsky (1986)による下接の条件（Subjacency Condition）分析、Uriagereka (1999)による複式書き出し（Multiple Spell-out）分析、Stepanov (2001, 2007)による後段併合（Late Merger）分析など、多くの研究者によって多種多様な分析案が出されてきた。Stepanov (2001, 2007)によれば、付加詞の島条件は自然言語の中の普遍的な制約（Universal Constraint）であるそうだが、複数の例外も報告されている。これらの例を(1b-d)にまとめて紹介する。[1]

(1)　a. * Rich’s sports car$_i$, Michelle’s insurance premium will increase
[if she buys t_i].

(Taylor 2007: 191)

b. *Sono keeki-o*$_i$ *Virginia-wa* [*mosi Quinn-ga* t_i *tabe-ta-naraba*]
that cake-acc V-top if Q-nom eat-did-cond
naki-dasu daroo.
cry-start would
"Virginia would start crying if Quinn ate that cake."

(Yoshida 2006: 51)

c. *Bungakubu-ni*$_i$ *Taro-wa* [*Jiro-ga* t_i *nyuugaku-sita-node*]
literature-department-to T-top J-nom enter-did-because
odoroi-ta.
get-surprised-did
"Taro got surprised because Jiro entered the department of literature (rather than some other department)."

(三原 1994: 55)

d. *Esute-ni*$_i$ *Taro-wa* [*Hanako-ga* t_i *kayot-ta-node*]
beauty clinic-to T-top H-nom go-did-because
utukusiku nat-ta to sitta.
beautiful become-did that knew
"Taro found out that Hanako became beautiful because she went to a beauty clinic."

(1a)は、付加詞の島条件に違反した英語の典型例を掲示している。抜取り要素 *Rich's sports car* に話題化移動（Topicalization）を適用し、文末の *if* 節から抜取ると非文法的と判断される。(1b-d)では、その付加詞の島条件違反を回避すると思われる日本語の目的語かき混ぜ（Scrambling）の例文を示している。(1b)は Yoshida (2006)からの引用で、英語の *if* 節に相当する*-naraba* 節からの項（*Sono keeki-wo*）の移動が起きている。(1c)は三原(1994)により提示されている例文で、英語の *because* 節に相当する*-node* 節からの項（*Bungakubu-ni*）の抜取りが起きている。同様に、(1d)では項（*Esute-ni*）の抜取りが起こっている。このように、付加詞である副詞節からの抜取りが起きている(1b-d)の例文すべてが文法的であると判断される。付加詞の島を研究テーマに扱う先述のすべての研究者たちの分析は、「付加詞からの抜取り

は一切許されない」という立場から議論を進めているため、(1b-d)のデータへ効果的な説明は与えられない。本論文では、近年発展が著しいカートグラフィ（Cartography）研究および位相（Phase）理論を組み合わせることによって、このような付加詞の島条件の例外と見なされる例文の説明を試みる。本論文の構成は以下の通りである。次節で日本語の副詞節からの抜取りを扱う代表的な先行研究２つを概観し、問題点を指摘する。続く３節では、本論文の独自の分析を紹介する。そして最終節となる４節で本論文のまとめを行う。

2.　先行研究

日本語の副詞節からの項の移動現象を扱う先行研究の代表として、三原(1994)と Yoshida (2006)を取り上げる。

2.1. 三原(1994)

三原(1994)は日本語の副詞節からの項の移動が可能な事例を複数紹介し、日本語の副詞節が必ずしも付加詞の島条件に従うものではないとする経験的なデータを提供している。それらの例を下記に紹介する。

(2) a. *Bungakubu-ni*$_i$ *Taro-wa* [*Jiro-ga* t_i *nyuugaku-sita-node*]
literature-department-to T-top J-nom enter-did-because
odoroi-ta.
get-surprised-did
“Taro got surprised because Jiro entered the department of literature (rather than some other department).”

(三原 1994: 55)

b. *Hokkaido-kara*$_i$ *Taro-wa* [*hahaoya-ga wazawaza* t_i *joukyou-sita-noni*]
Hokkaido-from T-top (his) mother-nom kindly visit-Tokyo-did-though
a-outosi-nakat-ta.
meet-try to-not-did

"Taro did not try to meet his mother although she kindly went up from Hokkaido to Tokyo (to meet him)."

(三原 1994: 55)

c. *Sono jiken-de*$_i$ *Taro-wa* [*Hanako-ga* t_i *kisos-arere-ba*]
that case-for T-top H-nom prosecute-ed$_{<passive>}$-cond
kaiko-suru-tumorideiru.
fire-does-plan to.
"Taro plans to fire Hanako if she is prosecuted for that case."

(三原 1994: 56)

(2a)は前節の(1c)で紹介した例と同じものであり、英語の *because* 節に相当する*-node* 節からの項（*Bungakubu-ni*）の抜取りを示している。(2b)は英語の *though* 節に相当する*-noni* 節からの項（*Hokkaido-kara*）の抜取りが起こっている。(2c)では、英語の *if* 節に相当する*-ba* 節からの項（*Sono jiken-de*）の移動を表している。いずれの例も、副詞節（付加詞）からの項の移動を起こしているが、文法的であると判断されている。伝統的には、これらの例に対して、Kuno (1973)や益岡・田窪 (1992)により論じられている「従属の度合い（Degree of Subordination）」という概念を用いての分析が提案されてきた。この概念を用いての分析は概略以下の通りである。[2] 「もし、副詞節の従属の度合いが低いと、より付加詞的となり、その節内からの移動は禁止される。反対に、もし従属の度合いが高くなれば、それは、より補部的であることを表し、節内からの移動も認可される。」この理論に則ると、(1b-d)および(2)のすべての例文中の副詞節は従属度が高く、より補部的ということになり、それ故にその内部から項の移動が許される、という説明が与えられる。

しかしながら、この「従属の度合い」を土台に据えて説明しようとすると、理論と経験の両面の問題が浮上する。まず、理論的な問題点について考察してみる。生成文法における標準的な想定では、補部には何らかの意味役割（theta-role）が付与される。Chomsky (1981)は、主要部によって選択される項（補部）と意味役割の付与の関係が 1 対 1 であるという、(3)に示した Theta Criterion を提案している。

(3) *Theta Criterion*

Each argument bears one and only one theta role, and each theta role is assigned to one and only one argument.

(Chomsky 1981: 36)

従って、日本語の副詞節が補部であると判断される場合、副詞節自体にも意味役割が付与されなければならない。しかし、どのような種類の意味役割が付与されるのか明らかではなく、日本語の副詞節を補部として扱うならば、この点を丁寧に説明する必要がある。

次に、経験的な問題点を考察してみる。先に紹介した先行研究では、日本語の副詞節を補部として分析することで、付加詞の島条件の例外を捉えようとしていたが、その分析への反例が存在する。まずは、動詞句前置（VP-Preposing）を用いたテストを確認する。

(4) a. *Quinn-ga sono hon-o kat-ta koto.*
Q-nom that book-acc buy-did fact
"The fact that Quinn bought that book."

b. *[$_{VP}$ *Sono hon-o kau*]$_i$ *Quinn-ga* t_i ***ta*** *koto.*
that book-acc buy Q-nom did fact

c. [$_{VP}$ *Sono hon-o kai*] $_i$ ***-sae*** *Quinn-ga* t_i ***si****-ta koto.*
that book-acc buy- even Q-nom do-did fact

d.* [$_{VP}$ *kai*]$_i$ ***-sae*** *Quinn-ga sono hon-o* t_i *si-ta koto.*
buy -even Q-nom that book-acc do-did fact

ここで押さえておくべきポイントは(4c)と(4d)の対比である。*-sae* という焦点を表す不変化詞により動詞の前置が駆動される場合、補部（項）も必ず随伴しなければならない (Saito 1985)。この点を念頭に置き、以下の例を考察してみる。

(5) a. *Quinn-wa* [(*mosi*) *Stillman-ga kita-naraba*] *nigedasu daroo.*
Q-top if S-nom come-cond run-away would
"Quinn would run away if Stillman came."

b. [$_{VP}$[(*mosi*) *Stillman-ga kita-naraba*] *nigedasi*]$_i$-***sae***
if S-nom come-cond run-away -even

Quinn-wa t_i *suru daroo*

Q-nom do would

c.? [$_{VP}$ *nigedasi*]$_i$-***sae*** *Quinn-wa* [(*mosi*) *Stillman-ga kita-ra]* t_i *suru daroo.*

run-away-even Q-top if S-nom come-cond do would

(Yoshida 2006: 60-61)

(6) a. *Quinn-wa* [*Stillman-ga ki-ta-node*] *nigedasu daroo.*

Q-top S-nom come-did-because run-away would

"Quinn would run away because Stillman came."

b. [$_{VP}$[*Stillman-ga ki-ta-node nigedasi*]$_i$-***sae*** *Quinn-wa* t_i *suru daroo*

S-nom come-did-because run-away–even Q-top do would

c.? [$_{VP}$ *nigedasi*]$_i$-***sae*** *Quinn-wa* [*Stillman-ga ki-ta-node*] t_i *suru daroo.*

run-away-even Q-top S-nom come-did-because do would

(5)は動詞句前置が起きた時の条件節の随伴性を、(6)は原因・理由節の随伴性を調べるためのテストが施されている。(5b)を見ると、(4)で見受けられた項の振る舞いと同様に、動詞が前置されると条件節も付随して移動することが示されている。しかし、これは必ずしも義務的ではなく、動詞の前置が起きたとしても条件節は元位置に留まることが許される。これは(5c)によって表されている。原因・理由節の場合も同様の結果が得られることが、(6b)と(6c)の対比から分かる。これらの例文が示すことは、日本語の条件節や原因・理由節は項ではなく、付加詞であるということである。

次に、*soo-su* 代入（*soo-su* Substitution）を用いたテストを確認する。このテストは英語の *do so* テストと同様にVP構成素を調べるためのテストとして機能する（Shibatani 1973; Terada 1990）。

(7) a. *Quinn-wa ringo-o tabe-ta.*

Q-top apple-acc eat-did

"Quinn ate an apple."

b. *Stillman-mo soo-si-ta.*

S-also so-do-did

"Stillman did so, too."

c.* *Stillman-mo remon-o soo-si-ta.*
S-also lemon-acc so-do-did
"Stillman did so a lemon."

(Yoshida 2006: 62-63)

(7a)のコンテクストがあり、(7b)のように「スティルマンもそうした。」という発話がなされる時、その解釈は「スティルマンもリンゴを食べた。」というものしか有りえない。これは(7b)と(7c)の対比から明らかである。換言すると、*soo-su* 代入が用いられる場合、目的語である項は *soo* の中に含まれてしまうため、(7c)のように、新しい項であるレモンを加えて「スティルマンもレモンを食べた。」という解釈を導き出すことは出来ない。このことを念頭に以下の例を考察する。

(8) a. *Quinn-wa* [*mosi Virginia-ga kaetta-naraba*] *kaeru deshoo.*
Q-top if V-nom go-home-cond go-home would
"Quinn would go home if Virginia went home."

b. *Stillman-mo soo-suru deshoo.*
S-also so-do would
"Stillman would do so, too."

c. *Stillman-mo* [*mosi Auster-ga kaetta-naraba*] *soo-suru deshoo.*
S-also if A-nom go-home-cond so-do would
"Stillman would do so if Auster went home ,too.

(Yoshida 2006: 62-63)

(9) a. *Quinn-wa* [*Virginia-ga kaet-ta-node*] *kaeru deshoo.*
Q-top V-nom go-did-home-because go-home would
"Quinn would go home because Virginia went home."

b. *Stillman-mo soo-suru deshoo.*
S-also so-do would
"Stillman would do so, too."

c. *Stillman-mo* [*Auster-ga kaet-ta-node*] *soo-suru deshoo.*
S-also A-nom go-did-home-because so-do would
"Stillman would do so because Auster went home, too."

(8)では *soo-su* 代入と条件節の関係を表している。(8a)の「クインは、もしヴァージニアが帰ったならば帰るでしょう。」というコンテクストを踏まえて(8b)の *soo-su* 代入が用いられた発話がなされる場合、その解釈としては「スティルマンも、もしヴァージニアが帰ったならば帰るでしょう。」が成立する。これは先ほどの(7b)で見た補部の振る舞いと同じである。しかし、重要なことに、条件節に関しては必ずしも *soo* によって包含されなくても良いことが(8c)によって示されている。 (8a)と(8c)をつなげると、「クインは、もしヴァージニアが帰ったならば帰るでしょう。スティルマンも、もしアウスターが帰ったならば帰るでしょう。」という解釈になり、これは文法的である。同様のことが(9)の原因・理由節にも当てはまる。従って、*soo-su* 代入のテストからも、日本語の条件節や原因・理由節は補部ではなく、付加詞であるという結論が導かれる。

2.2. Yoshida (2006)

次に Yoshida (2006)によるアプローチを概観する。Yoshida (2006)は、前節で紹介した、日本語副詞節を補部とする分析を批判した上で、指示性（Referentiality）に基づく分析を提案している。その要点を述べると、「指示性が高ければ抜取りが可能になり、指示性が低ければ抜取りが許されない」というものだ。

指示性に基づく分析の問題点としては、指示性の概念自体が不明瞭であり、定義が不鮮明であるが故に、議論の土台としては不適切であることが挙げられる。これは Boeckx (2012)で指摘されていることであり、実際 Kroch (1989)は指示性が統語論ではなく、語用論において機能する概念であることを論じている。また、Szabolcsi and Zwarts (1990, 1993, 1997)は、弱い島の効果（Weak Island Effect）を説明するには、指示性を用いての分析が有効であることを主張しており、Boeckx や Kroch と同様に、意味論や語用論で扱われるべきものとして指示性を捉えている。しかし、以下のような興味深い例があることも指摘されており、これらの例を見ると統語論が深く絡む問題であるようにも思われる。

(10) a. *Quinn-wa* [*futa-tu*$_i$ (**mosi*) *Virginia-ga ringo-o* t_i *tabe-ta-naraba*]
Q-top 2-cl(thing) V-nom apple-acc eat-did-cond
okoru *daroo*. (cf. (1b))
get-angry would
"Quinn would get angry if Virginia ate two apples."

b. *Quinn-wa* [*dareka*$_i$ (**mosi*) *Virginia-ga tomodati-o* t_i *party-ni*
Q-top someone V-nom friend-acc party-dat
yon-da-naraba] *naki-dasu* *daroo*. (cf. (1b))
invite-did-cond cry-start would.
"Quinn would start crying if Virginia invited some friend to the party."

(Yoshida 2006: 77-78)

(10a)では数量詞 *futa-tu* が、(10b)では不定数量詞 *dareka* が元位置から抜取られる際に、*mosi* という語句が生起していると非文法的と判断され、生起しない場合は抜取りが文法的であると判断される。[3] *mosi* の有無により、付加詞内部からの抜取りの文法性の判断が変わることから、これらの例文が統語論で扱われるべき現象であることがうかがえる。よって本論文では、Yoshida (2006)と同様に、*mosi* が(10a, b)において島効果を誘発する要素であると分析した上で、一連の日本語の付加詞の島条件の例外的振る舞いが統語論で処理されるべきであることを主張する。以下では、本論文独自の分析案を提示する。

3. 提案

前節の先行研究を鑑み、本論文では Yoshida (2006)と同様に、日本語副詞節が付加詞であるという立場から分析と提案を行う。本論文のアプローチは、付加詞の島条件が通言語的に見て普遍的な制約であると論じる Huang (1982)、Stepanov (2001, 2007)とは一線を画し、日本語の副詞節が付加詞でありながらも項の移動は許し、*futa-tu* や *dareka* というような数量詞の移動は認可しないという議論を構築する。以下では、日本語副詞節の中で付加詞の島条件に抵触しない、条件節と原因・理由節の内部構造の分析並びに、その分析に基づく、それらの副詞節（付加詞）からの項の移動のメカニズムについ

て提案する。

3.1. 付加詞の島条件違反を回避する日本語副詞節の内部構造

Haegeman (2006, 2012)に倣い、日本語の副詞節も２種類に大別されることを主張する。１つは中核的副詞節（Central Adverbial Clause）であり、他方は周辺的副詞節（Peripheral Adverbial Clause）である。

(11) a. Central Adverbial Clause:
It contains a function of modifying events/states of affairs expressed in the main clause and has no illocutionary force in its own structure.

b. Peripheral Adverbial Clause:
It expresses an independent proposition that serves as the immediate discourse background to the associated clause and possesses its own illocutionary force independent from the main clause.

(Haegeman 2006: 29 -36)

(11)に概略が示されているように、中核的副詞節は主節との依存度が高く、副詞節内には独自の発話の力（Illocutionary Force）を持たない。他方で、周辺的副詞節は、主節から独立しており独自の発話の力を持つ。

(12) a. If your back-supporting muscles tire, you will be at increased risk of lower-back pain.

b. If we are so short of teachers (‘Jobs crisis grows as new term looms’, August 30), why don’t we send our children to Germany to be educated?

(Haegeman 2006: 29)

典型的な例が(12)に示してある。(12a)は主節で表される事象を修飾する形で副詞節が起用されている。これが中核的副詞節の特徴である。一方で、(12b)は括弧で表される事実を踏まえ、主節で表される提案の背景を示す形で副詞節が機能している。これが周辺的副詞節の特徴である。２者には統語的に異なる特徴が確かに存在することが以下の例からうかがえる。

(13) a. * I didn’t drop the class because <u>frankly</u> I didn’t like it, I dropped it because it was too expensive.

b. [A referendum on a united Ireland]…will be a good thing, because frankly they need to be taken down a peg and come down to earth and be a little bit more sober in their approach to things.

(Haegeman 2006: 32)

(13a)は中核的な副詞節であり、その内部に発話行為と関連付けられる副詞 *frankly* が生起出来ない (Cinque 1999)。しかし、(13b)の周辺的副詞節ではそれが可能である。

(14) The students should have enough money, although remember we are expecting a drop in the department funding.

(Haegeman 2006: 32)

(14)は周辺的な副詞節の例であり、その節内では命令法を用いることが許される。

(15) a. Mary went back to college after/before her children had finished school, didn't she? / * hadn't they?

b. Bill took a degree at Oxford, while his daughter is studying at UCL, * didn't he? / isn't she?

(Haegeman 2006: 31)

(15a)は中核的な副詞節の例であり、付加疑問を作る際は主節の主語と動詞と一致しなければならない。しかし、(15b)の周辺的な副詞節の場合は、主節の主語と動詞と一致してはならず、副詞節内の主語と動詞と一致しなければならない。

このような統語上の違いをまとめると以下のように表される。[4]

(16) a. Central Adverbial Clause :Sub(ordinate) Mod* Fin TP

b. Peripheral Adverbial Clause :Sub(ordinate) Force Top* Focus Mod* Fin

(Haegeman 2012: 116) (cf. Haegeman 2006: 36)

２者の大きな違いは、発話の力を符号化する ForceP の有無である。よって、本論文では、ForceP が副詞節内部からの移動を駆動する要因を有する投射であると想定する。Chomsky (2000, 2004, 2008)に従うと、CP と vP がフェーズであり、フェーズ主要部の C と v は自身の持つ素性を下位の T と V に、それぞれ継承する。この想定に基づき、本論文では ForceP 主要部が端素性（Edge

Feature）を有し、その素性が当該の移動を駆動すると想定する。また、φ 素性については FinP 主要部が有し、下位の T へと継承されると想定する。

この統語的な差異を踏まえ、当該の日本語の副詞節の分類を行ってみる。

(17) a. ? [(*Mosi*) *sottyokuni ittte / kokodake no hanasi* *Quinn-ga sono keeki wo*
If frankly / confidentially Q-nom that cake-acc
tabe-ta-naraba] *Virginia-wa naki-dasu-darou.* (cf. (1b))
eat-did-cond V-top cry-start-would
"Virginia would start crying, frankly/ confidentially if Quinn ate that cake."

b. [*Hanako-wa kokodake* *no hanasi esute-ni* *kayot-ta-node*]
H-nom confidentially beauty clinic-to go-did-because
utukusiku nat-ta. (cf. (1d))
beautiful become-did
"Between you and me, Hanako became beautiful because she went to a beauty clinic."

(17a, b)ともに、発話行為と関連付けられる副詞（*sottyokuni ittte* や *kokodake no hanasi*）を用いて独自の ForceP が存在するかどうかのテストを行っている。(17a)は容認性が少し落ちるものの、両者とも文法的であると判断されることから、当該の日本語の副詞節が周辺的であることが示唆される。次に遠藤(2009)を概観する。

(18) a. *Taro-wa* [*Hanako-o* *nikundei-ta-kara*] *hihanshi-ta* *no-deha-nai*.
T-top Hanako-acc hate-did-because criticize–did neg
"Taro criticized Hanako; it is not because he hated her."

b. **Taro-wa* [*Hanako-o* *nikundei-ta-kara-ne*] *hihanshi-ta* *no-deha-nai.*
T-top Hanako-acc hate-did-because-part criticize–did neg
"Taro criticized Hanako; it is not because he hated her."

c. *Taro-wa* [*Hanako-o* *nikundei-ta-kara-ne*] *home-nakatta*.
T-top Hanako-acc hate-did-because-part praise–did-not
"Taro did not praise Hanako; it is because he hated her."

(遠藤 2009: 101)

遠藤(2009)は、終助詞 *ne* が副詞節の分類テストに有効であることを示している。(17b, c)の対比に見られるように、対人ムードを表す終助詞 *ne* が付随すると、独立した発話の力を持つ解釈が優勢となり、主節の否定のスコープの中に入ることが難しくなる。この終助詞 *ne* を用いたテストを当該の日本語副詞節にも応用する。

(19) a. *Sono keeki-o*$_i$ *Virginia-wa* [*mosi* *Quinn-ga* t_i *tabe-ta-naraba-ne*]
that cake-acc V-top if Q-no eat-did-cond-part
naki-dasu *daroo.*
cry-start would
"Virginia would start crying if Quinn ate that cake."

b. *Esute-ni*$_i$ *Taro-wa* [*Hanako-ga* t_i *kayot-ta-node-ne*]
beauty clinic-to T-top H-nom go-did-because-part
utukusiku nat-ta *to* *sitta.*
beautiful become-did that knew
"Taro found out that Hanako became beautiful because she went to a beauty clinic."

(19a, b)のテスト結果を見ると、どちらの例文も対人ムードを表す終助詞の *ne* が付随することが可能であることが確認される。よって、これらの副詞節が周辺的副詞節であることがうかがえる。

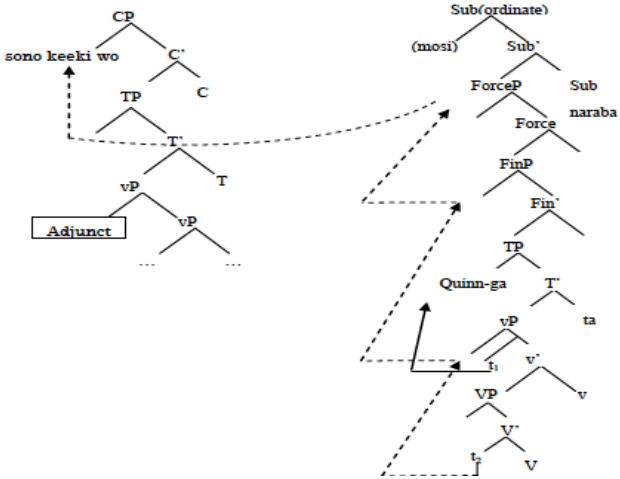
3.2. 付加詞の島条件を回避する日本語副詞節からの項の抜取り

Kayne (1994)の分析に倣い、当該の日本語副詞節は樹形図上では左側に付加することになり、ここでは vP に付加すると想定する。[5]

(20) a. *Sono keeki-o*$_i$ *Virginia-wa* [*mosi Quinn-ga* t_i *tabe-ta-naraba*] *naki-dasu daroo.*

that cake-acc V-top if Q-nom eat-did-cond cry-start would

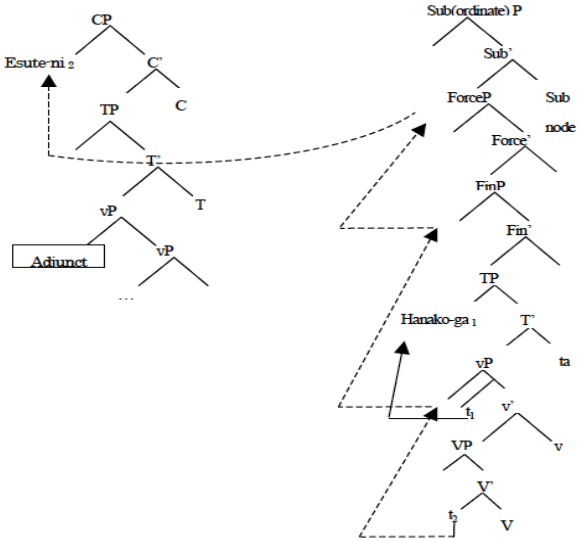
"Virginia would start crying if Quinn ate that cake.



b.*Esute-ni*$_i$ *Taro-wa* [*Hanako-ga* t_i *kayot-ta-node*] *utukusiku nat-ta to sitta.*

beauty clinic-to T-top H-nom go-did-because beautiful become-did that knew

"Taro found out that Hanako became beautiful because she went to a beauty clinic."



(20a, b)の樹形図を見ながら具体的な派生を確認する。まず、目的語は V の補部に基底生成する。v の端素性により、vP の指定部へと引きつけられる。次の段階で重要なのが、副詞節が独自の ForceP を投射するか否かである。これらの副詞節は、どちらも主節とは独立した ForceP を有するため、移動を駆動する端素性が存在することが示唆される。すなわち、ForceP 主要部の持つ端素性により目的語の移動が起こり、主節の CP 主要部からアクセス可能な位置（Escape Hatch）へと置かれる。最終的には、主節の CP 主要部にある端素性により当該の目的語の移動が引き起こされ、主節 CP の指定部へと導かれる。いずれの移動も(21)に示す、フェイズ不可侵条件（Phase Impenetrability Condition）を遵守しており、各フェーズの Escape Hatch を利用しながら移動のステップを刻んでいる。

(21)　*Phase Impenetrability Condition*

In phase α with head H, the domain of H is not accessible to operations outside α; only H and its edge are accessible to such operations.

(Chomsky 2000: 108)

3.3. 条件節 *mosi* と抜取り要素との相互作用

ここで、(10a, b)で紹介したデータについて考察を深める。関連のデータを(22)に再掲する。

(22) a.　*Quinn-wa* [*futa-tu*$_i$ (**mosi*)　*Virginia-ga ringo-o* t_i　*tabe-ta-naraba*]
Q-top　2-cl(thing)　V-nom　apple-acc　eat-did-cond
okoru　*daroo*. (= (10a))
get-angry　would
"Quinn would get angry if Virginia ate two apples."

b.　*Quinn-wa* [*dareka*$_i$ (**mosi*) *Virginia-ga tomodati-o* t_i *party-ni*
Q-top　someone　V-nom　friend-acc　party-dat
yon-da-naraba]　*naki-dasu*　*daroo*. (= (10b))
invite-did-cond　cry-start　would.
"Quinn would start crying if Virginia invited some friend to the party."

(Yoshida 2006: 77-78)

これらの例文で興味深い点は、条件節のマーカーである *mosi* が顕在化する場合は *futa-tu* や *dareka* というような数量詞の移動が阻止され、*mosi* が不可視の場合は許されるということであった。この文法性の差異は何に起因するのだろうか。本論文では、その原因が条件節マーカー*mosi* と移動要素 *futa-tu* や *dareka* の持つ演算子（Operator）としての機能が拮抗するためだと主張する。換言すると、1 つの変項（Variable）に対し、束縛する候補として２つの演算子が存在することになり、値が決められないためである。

(23) **Inner Structure of the Adverbial Clause (22a)**

$[_{Sub}$ *mosi* $[_{ForceP}[_{FinP}[_{TP}$ *Virginia-ga*$_1$ $[_{vP}$ t_1 $t_2 \ldots]$ $_{T^0}]_{Fin^0}]_{Force^0}$ <EF>$]_{Sub^0}$ *naraba*$]$

futa-tu$_2$

(24) **Inner Structure of the Adverbial Clause (22b)**

$[_{Sub}$ *mosi* $[_{ForceP}[_{FinP}[_{TP}$ *Virginia-ga*$_1$ $[_{vP}$ t_1 $t_2 \ldots]$ $_{T^0}]_{Fin^0}]_{Force^0}$ <EF>$]_{Sub^0}$ *naraba*$]$

dareka$_2$

「1 つの変項に対して 1 つの演算子を割り当てよ」という定式化は、(25)に示す Koopman and Sportiche (1983)の一対一対応の原理（Bijection Principle）によりなされており (26)のような弱交差（Weak Crossover）現象を説明する際にも有効である。

(25) *Bijection Principle*

Each operator must A-bar bind exactly one variable, and each variable must be A-bar bound by exactly one operator.

(Koopman and Sportiche 1983: 148)

(26) * His$_i$ mother loves everyone$_i$.

5.　まとめと今後の課題

本論文では、付加詞の島条件の例外的振る舞いを示す日本語の副詞節（条件節および原因・理由節）を考察の主対象にし、その付加詞内部からの項の移動を認可する派生メカニズムと *futa-tu* や *dareka* のような数量詞の移動を阻止する場合の要因を探求してきた。2.1 節で示したように、日本語の副詞節は英語などの副詞節と同様に付加詞であり、「付加詞であるが項の抜取りは許す」という立場から議論を進めてきた。3.1 節では、その移動を駆動する鍵について論じた。すなわち、それは、副詞節内部に主節とは独立した形で投射する ForceP の存在であった。その派生メカニズムを簡潔に述べると、ForceP 主要部が持つ端素性により項の移動が駆動され、Escape Hatch まで引き上げられることにより主節の CP 主要部からアクセスされ、最終的に主節の CP 指定部へと移動することが許される、というものであった。また、条件節マーカーの *mosi* が表出する場合に *futa-tu* や *dareka* という数量詞の移動が許されない原因は、それが共通して持つ演算子としての役割が拮抗するためであると論じた。この構図(23)(24)は、一対一の原則に照らしてみた際に、変項にとって不適切であり、値が決められない。

紙面の都合に加え、十分な研究がなされてない故(1a)で紹介した英語の副詞節と付加詞の島について言及することができなかった。(1a)のような英語のデータでは、「なぜ項の抜取りが許されないのか」という問いが思い浮かぶ。この問いの答えは、周辺的副詞節と中核的副詞節の構造上の違いから導かれるかもしれない。(1a)に Haegeman (2006, 2012)で提唱されているテストを用いると、中核的な副詞節である可能性が高いことが分かる。

(27) Michelle’s insurance premium will increase if she buys Rich’s sports car,
　　* doesn’t she? / won’t it? (cf. (1a))

中核的な副詞節には独自の ForceP が投射しない。つまり、移動を駆動する要因が存在しないことを意味するため、本論文で扱った日本語の副詞節とは異なり、副詞節内からの移動が起こらないことを予測する。この予測が正しいかどうか、さらなる研究が必要であり、今後の課題としたい。

註

*本論文は、２０１６年1月６日から1月８日にかけて University of York および York St John University の合同で開催された、24th Conference of the Student Organisatin of Linguistics in Europe (ConSOLE XXIV)での発表の１部分を改訂したものである。学会発表並びに本論文の執筆にあたり、指導教員の西岡宣明先生、北九州市立大学の葛西宏信先生、University of Crete の Elena Anagnostopoulou 先生、University College London の須藤靖直先生、Patrick Elliott 氏、University of Huddersfield の Rebecca Woods 先生に有益なご指導とご助言を賜った。ここに特記して感謝の意を示したい。自明のことであるが、本論の内容の不備は全て筆者の責任である。

1. 本論文の例文紹介は、構造を分かりやすく提示するために、すべて英語表記に統一する。日本語で書かれた論文である三原（1994）や遠藤（2009）の論文からのデータの引用はすべて筆者が英語に変換したものである。

2. Yoshida (2006)でも指摘されているが、「従属の度合い」という概念を用いるにあたり、その定義が必要であるが、先行研究の中では明確な定義がなされていない。そのため、ここでは先行研究や Yoshida (2006)から意図される解釈を基に議論を進めている。

3. 数量詞 *futa-tu* や不定数量詞 *dareka* は、一見すると当該の副詞節の領域から抜け出ているように思われるかもしれないが、実際は副詞節の領域内にあることが示唆されるデータがある。

(i) * *Quinn-wa* *futa-tu*$_i$ *kankan-ni* [*Virginia-ga* *ringo-o* t_i *tabe-ta-naraba*]
Q-nom 2-cl(thing) furiously V-nom apple-acc eat-did-cond
okoru *daroo.* (cf. (10a))
get-angry would
"Quinn would furiously get angry if Virginia ate two apples."

副詞の *kankan-ni* は、様態や結果を表すことから主節の動詞句 *okoru daroo* を修飾すると考えられる。従って、その統語的位置は VP 領域である。もし *futa-tu* が基底生成される位置から *kankan-ni* を飛び越えて移動することが許されるならば、それは条件節（付加詞）から抜け出ていることを意味する。ところが(i)の文法性の結果を見るに、その移動は許されないことから *futa-tu* は条件節（付加詞）からは抜け出せていないことが

示唆される。

4. Haegeman (2006, 2012) は英語やヘブライ語の項の前置に加え、ロマンス諸語（とりわけ南方のイタリア方言）の接辞移動（Clitic Left Dislocation）を研究の主対象として取り組み、それらの現象をカートグラフィ研究の立場から論じている。骨子を簡略に述べると、様々な機能投射が CP 領域に存在する可能性を示唆し、SubordinateP (=SubP)、ForceP、TopicP* (=TopP*)、FocusP (=FocP)、ModifierP* (=ModP*)、FiniteP (=FinP)を想定している。アスタリスク「*」は、当該の投射が再帰的であることを表す。SubP と ForceP を区別し、それぞれ独自の投射を想定する理由は、前者が従属接続詞が標示される位置、後者が発話の力を符号化（Encode）する位置として、それぞれ別々の機能を有すると考えているためである。詳しくは Bhatt and Yoon (1992) を参照されたい。ModP は時や場所などを表す副詞が標示される位置として考えられている。

5. ここでは副詞節の主節への付加位置はさほど重要ではない。ここでの要点は副詞節内部の CP 構造の違いである。「日本語副詞節が vP に付加する」と想定する動機付けは、Iatridou (1991)、Bhatt and Pancheva (2006)、Taylor (2007)の英語の条件節の分析に依存する。例を一部紹介するが、詳しくは上記の文献を参照されたい。

(i) a. * She$_i$ yells at Bill if Mary$_i$ is hungry.

b. If Mary$_i$ is hungry, she$_i$ yells at Bill.

c. If she$_i$ is hungry, Mary$_i$ yells at Bill.

(ia-c)では Condition B と C を用いてのテストを行い、条件節の付加位置を調べている。

(ii) a. I will leave if you do and John will $_{\text{leave if you do}}$, too.

b. I will leave if you do and John will *do so* too.

(Bhatt and Pancheva 2006)

(iia, b)では、VP 削除と do so 代入を用いてのテストを行っている。これらの対比により、条件節が文末に生起する際は vP (VP)に付加していることが強く示唆される。

参考文献

Bhatt, Rajesh and Roumyana Pancheva. 2006. Conditionals. In M. Everaert, et al. (eds.), *The Blackwell Companion to Syntax Volume* I, 638-687. Oxford: Blackwell.

Bhatt, Rakesh, and James Yoon. 1992. On the Composition of COMP and Parameters of V2. In D. Bates (ed.), *Proceedings of WCCFL* Vol. 10, 41-52. Stanford: CLSI.

Boeckx, Cedric. 2012. *Syntactic Islands*. Cambridge: Cambridge University Press.

Cinque, Guglielmo. 1999. *Adverbs and Functional Heads: A Cross-linguistics Perspective*. Oxford: Oxford University Press.

Chomsky, Noam. 1981. *Lectures on Government and Binding*, Dodrecht: Foris.

Chomsky, Noam. 1986. *Barriers*. Cambridge, MA: MIT Press.

Chomsky, Noam. 2000. Minimalist Inquiries: The Framework. In R. Martin, at al. (eds.), *Step by Step*, 89-155. Cambridge, MA: MIT Press.

Chomsky, Noam. 2001. Derivation by Phase. In M. Kenstowicz (ed.), *Ken Hale: A Life in Language*, 1-52, Cambridge, MA: MIT Press.

Chomsky, Noam. 2008. On Phases. In R. Freidin et al. (eds.), *Foundational Issues in Linguistic Theory: Essays in Honor of Jean-Roger Vergnaud*, 133–166. Cambridge, MA: MIT Press.

遠藤喜雄. 2009. 「話し手の聞き手のカートグラフィー」 『言語研究』 136: 93-119.

Haegeman, Lilliane. 2006. Argument Fronting in English, Romance CLLD, and the Left Periphery. In R. Zanuttini, et al. (eds.), *Negation, Tense and Clausal Architecture: Cross-linguistic Investigations*, 27–52. Washington, DC: Georgetown University Press.

Haegeman, Lilliane. 2012. The Syntax of MCP: Deriving the Truncation Account. In L. Aelbrecht et al. (eds.), *Main Clause Phenomena: New Horizons*, 113-134. Amsterdam / Philadelphia: John Benjamins.

Huang, C.-T. James. 1982. *Logical Relations in Chinese and the Theory of Grammar*, Ph.D. dissertation, MIT.

Iatridou, Sabine. 1991. *Topics in Conditionals*, Ph.D. dissertation, MIT.

Kayne, Richard. 1994. *The Antisymmetry of Syntax*. Cambridge, MA: MIT Press.

Koopman, Hilda and Dominique, Sportiche. 1983. Variables and the Bijection Principle. In *The Linguistic Review* 2, 139-160.

Kuno, Susumu. 1973. *The Structure of the Japanese Language*. Cambridge, MA: MIT Press.

Kroch, Anthony. 1989. *Amount Quantification, Referentiality, and Long Wh-movement*. Ms., University of Pennsylvania.

益岡隆志・田窪行則. 1992. 『基礎日本語文法−改訂版』 東京：くろしお出版.

三原健一. 1994. 『日本語の統語構造−生成文法理論とその応用』 東京：松柏社.

Rizzi, Luigi. 1997. The Fine Structure of the Left Periphery. In L. Haegeman (ed.), *Elements of Grammar: Handbook of Generative Syntax*, 281-338. Dordrecht: Kluwer.

Saito, Mamoru. 1985. *Some Asymmetries in Japanese and Their Theoretical Implications*. Ph.D. dissertation, MIT.

Shibatani, Masayoshi. 1973. Semantics of Japanese Causativization. In *Foundation of Language* 9, 327-373.

Stepanov, Arthur. 2001. Late Adjunction and Minimalist Phrase Structure. In *Syntax* 4, 94-125.

Stepanov, Arthur. 2007. The End of CED? Minimalism and Extraction Domains. In *Syntax* 10, 80-126.

Szabolcsi, Anna and Frans Zwarts. 1990. Semantic Properties of Composed Functions and the Distribution of Wh-phrases. In M. Stokhof and L. Torenvliet (eds.), *Proceedings of the Seventh Amsterdam Colloquium*, 529-555. Amsterdam: ILLI.

Szabolcsi, Anna and Frans Zwarts. 1993. Weak Islands and an Algebraic Semantics for Scope Taking. In *Natural Language Semantics* 1, 235-284.

Szabolcsi, Anna and Frans Zwarts. 1997. Weak Islands and an Algebraic Semantics for Scope Taking. In A. Szabolcsi (ed.), *Ways of Scope Taking*, 109-155. Dordrecht: Kluwer.

Taylor, Heather. 2007. Movement from IF-clause Adjuncts. In *UMWP in Linguistics* 15, 192-206.

Terada, Michiko. 1990. *Incorporation and Argument Structure in Japanese*. Ph.D. dissertation, University of Massachusetts.

Uriagereka, Juan. 1999. Multiple Spell-Out. In S. D. Epstein and N. Hornstein (eds.), *Working Minimalism*, 251-282. Cambridge, MA: MIT Press.

Yoshida, Masaya. 2006. *Constraints and Mechanisms in Long-Distance Dependency Formation*. Ph.D. dissertation, University of Maryland.